特別寄稿

実感的文化表現論(上)

三井逸友

ワードプロセッサは何を変えるか？

ワープロは組版機の新興勢力として，その版図を拡大しつつある。現在では，電子組版機の端末としてシステム化され，さらに通信技術とのドッキングにより，今後の伸展はますます進むと予想されます。

一方，印刷業界でのワープロ革命とは違う意味で，民生レベルでのワープロが日本語の歴史に「文化革命」を引き起こしています。

本稿では，『東京の軽印刷業の将来ビジョン』の執筆者・三井逸友駒沢大学助教授に，文化の表現のあり方，流れが変ってくれば印刷業への影響も少なくないとする視点から，ワープロのいち利用者として体験論を綴って戴いた。ワープロの文化的考察のほか，「入力方式に現れた考え方の違い」「字を書く機械と文を書く機械」「望ましい入力方式とは」など印刷業に携わる人たちが押えて置きたいポイントにも言及しています。

はじめに　ワープロは日本語の文化革命？

『軽印刷』誌からの依頼で（注―１），先にＯＡ化・ワープロ利用の拡大が軽印刷にもたらす影響を考えてみた。

その中で，私は，「ワープロ戦争」の販売合戦により，ワープロの使用が日常生活に浸透し，我々の言語表現と切り離せないところにまできつつあるという点に注目したのである。これは，日本語の歴史にとって，一種の「文化革命」であるかもしれない。

こうした実感は，私自身が実際にワープロを使ってみて感じたことなのである。この経験のなかで，幾つか考えてみたことを，ここでもう一度書きとめてみた。

素人の，個人的実感からの話ではあるが，文化の表現のあり方，流れが変ってくれば，それにかかわる印刷業などにも，影響するところは少なくないかもしれない。

そうした立場から，目を通して頂けると幸いである。

（注―１）三井逸友「ＯＡ化・ワープロ導入と文書情報処理の今後」『軽印刷』86年２月号・３月号。

第１章　ワープロの役割・効果

現在普及しつつあるワープロも，随分多様になってきた。なかでも，機能は簡略化されているが，手軽で安価な，小型のポータブルタイプが急増している。そのなかには，オモチャに近いようなものもある。

しかし，そんなものでも相当の働きをするのであり，もっと重要なことは，これが経済活動からさらに市民生活のなかの，さまざまなとこ

ろにワープロが普及するのを助けていることである。

現在使われているワープロは，本格機も含め，未だ情報ネットワークの1ターミナルを構成している場合は少ない。しかし，その限りにおいても，相当の効果を発揮しつつあることは，言うまでもない。そこで，私は，『軽印刷』誌上の小稿で，一般企業や官公庁，或いは個人でのワープロ使用の役割と効果を，整理してみた。

（1） ワープロは，誰にでも，完全な日本語文章を書いて，これを整然と，きちんとした書体を用いて印刷できるようにする機械である。これを扱う能力のうえでは，分業・分化がやはり生じていくのであるが，基本的には誰でも操作できる点が画期的である。

（2） 次に，これに関連して，ワープロはそれ自体が文書ファイルやデータベースの機能を果たしうる。とりわけ，反復使用される定型文書や，名簿などの蓄蔵と整理に関しては，非常に有効な機能を発揮する。それだから，個人活動の「事務化」につながるとも言える。

また，語彙や文章のファイル化が，文作成を助けるものになる。

（3） ワープロ利用が普及する事により，「手書き」の文字ないし文書というものが，一部の場合以外では，社会的に承認されなくなるという効果を持つ。「手書き」で，高い品位の文字を書くのは，ワープロ使用に比べ遙かに効利化としては不十分に思われる。第一，それだけのものであれば，日本語ワープロがこれほど急速に普及し，利用されるようになる筈がない。

和文タイプライターが，なぜ市民生活に普及しなかったのであろうか。それは，当然ながら，何よりも，2,000〜3,000字にものぼる文字を並べた文字盤を相手に，文字を拾い，並べていくということが容易ではないからである。その苦労に報いるだけのプラスアルファが，これにはないからでもある。これの延長上であるならば，ワープロには大した意味はないのであった。

また，カナタイプでは，後に見るように，日本語文の利点がまるで生かせないから，普及する条件は初めからなかったのである。

ところが，ワープロが普及するようになったのは，この多数にのぼり，各々が表意文字であって，また複数の発音を持つという厄介な存在である漢字を含む文を，綴ることができるからなのである。

これは，ある意味では偶然の産物と言えるものなのかもしれない。和文タイプ同様の文字盤を並べていた（全文字配列方式）のでは，ワープロの操作は容易にならない。そこで，入力方式がさまざま研究された結果，いわゆる「かな漢字変換」方式が開発され，主流になることになった。これによって，ワープロは一般の利用に供せるようになったのみならず，実は画期的なことを成し遂げたのである。

この違いは，情報処理技術上も大きいのみならず，入力主体＝人間と，出力＝打ち出される文章との関係においても，大きい。

全文字配列方式というものでは，文字と人間とは，文字の数に応じた1対1の対応関係の上にのみ接しているのであって，機械の中でどのような処理があろうとも，その文字を拾う＝選択すること，これをつなげて，かな漢字の混じった，意味を持つ「文章」にすることは，全て主体の選択と判断にゆだねられている。そして字は，機械上では発音を離れた「字」そのものとして取り扱われる。裏返せば，機械は，記憶やレイアウトなどの機能を別とすれば，何もしてくれない。まさしく，「字を書く機械」なのである。それどころか，甚だ困ることは，漢字には複数の読みがあるにもかかわらず，文字盤上には基本的に1つの読み方による配列しか可能でないため，主体の側で，その都度，読みの変換操作を加えた上で入力せねばならないのである。これでは，「文を書く」ことは初めから度

外視された操作なのであった。

これに対し，かな漢字変換方式などは，誰でも扱える少ない数の選択肢＝キーボードによって，漢字を含んだ文字を取り出そうとする努力から生まれた。このためには，漢字のコード化のみならず，読みに基づく分類整理・ファイル化が必要であり，それのみでも大きな技術進歩であった。さらに，1字毎の読みと文字の対応の段階（単漢字選択変換方式）から，より容易で速い操作のために，熟語，そして送りがななどを含む入力に対応する変換が研究された。日本語には，同音異義語が多く，また単語の分かち書きの習慣がないため，こうした方式の実用化のためには，文法解析や頻度研究などが必要であったのであるが，言語学の成果の利用が，それを可能にしたのである。

こうした研究と応用は日進月歩であって，今日も盛んに，より高度で操作容易な入力や変換方式がつくられ続けている。しかし，そこまでいかずとも，現在主流となっている「文節変換」率が低いし，容易ではない。

（4）　ワープロによる文書作成は，一度入力した原稿を，容易に手直しし，或いはさまざまな文書やデータなどと組み合わせて，仕上げていくことができるため，メモの段階から，文を作り，仕上げ，そして配布される形にするまでの過程が，連続的に，効率よく進められることになる。また，この過程を逆にたどることもできるので，完成原稿の状態やプリントイメージから，作り手へのフィードバックが可能であり，文の作り方が変ってくる。書き手が読者の目を以て，自分の作文を評価し，正していくことが容易になるのである。

また，完成時の予定枠や，割り付け，構成，レイアウトなどについて，書き手が後の過程にさまざまに関わる，つまり編集者や印刷担当者の領域に関与する可能性と必要性が大きくなるし，その逆も言える。一方通行でなくなってくるのである。

複数の人間の共同作業による執筆も，より楽になり，まとめ易くなろう。

（5）　勿論ワープロは，人間と電子系情報システムとの接点に立つ，情報ネットワークの端末＝入力ないし出力装置を構成できる機器であり，そうした使用の段階（＝テレテックス等）において，画期的な役割を発揮するものになる。もっともそうした役割が発展すれば，ワープロという特定の形態はだんだんなくなるかもしれない。

第2章　ワープロと文化としての言語表現

ワープロは何が画期的なのか

上に見たことは，主には経済活動を中心にした関わりでの位置づけである。しかし，ワープロ利用の意味を考えてくると，そのOA化などとの関わりを別として，人間の言語表現，国民の文化との関わりについては，まだ確認されていない点もあることに気付く。

「文化」とは何か，ということも難しい検討課題であるが，言語活動がその重要な担い手であることは間違いないし，言語の体系自体がまた文化の重要な構成要素でもある。その言語が，人間の意識活動から生みだされ，またそれを支え，構成させ，そして現実の反映のなかで具体的な形を整え，文章という整然とした形をとり，その文章が，文字という記号系によって表現され，伝達や記録可能なものになっていく。それだから，人間は，自分たちの手段としての文化を共有し，継承し，創造していくについて，意思表現の媒体としての文章を重要視してきたの

である。

さて，いささか瑣事にこだわるようであるが，ワープロは一体「字を書く機械」であろうか，それとも「文を書く機械」であろうか。このことは，意外に認識されていないようにも見える。例えていえば，現在のワープロ生産メーカーの段階でも，このことがきちんと確認されていないようである。

ワープロは，漢字を含めた文字を並べ，整理し，記憶し，プリントする機械である，とするならば，これは，基本的には「字を書く機械」である。従来の和文タイプライターの機能に，記憶と空間的なレイアウト，さらには印字上の約束事（禁則処理等）を加えていくと，日本語ワープロになるという解釈になろう。これ自体も大変なことであるが，しかし，そうした見方だけでは，「ワープロが人間生活に与える意味の方式」によって，我々は，容易に急速にワープロの操作ができるだけでなく，大きな成果を享受することができるようになったのである。

我々が操作している機械は，もはや「字を書く」だけのものではなく，かなによって綴られた文そのものを前提にし，これを，漢字を用いた通常の文章表現そのものに，直ちに変えてプリントすることができるのである。つまり，機械は「文を書く」ことを前提として既に構成されており，これを助けるものになっているのである。

「日本語ワープロ」の利点

日本語にとって，かな漢字混じりの文字表現を行うというのは，大きな障害とも考えられてきたが，現実には，そこにこそ多くの利点がある。それゆえ，カナモジの使用も，ローマ字化も，定着しなかったのであった。漢字により，文字自体が意味を直接表現し，読みが変っても，その意味を共通のものにすることができる。そ

れにより，表現は多様にでき，しかも速読性に優れている。「ハードコピー」の利点の一つでもある。漢字の組み合わせによる造語が容易で，その意味も理解し易い。同音異義語が多いのは日本語の困難の一つであるが，漢字表現はこの問題を視覚上では解決してくれる。また，かなが活用語尾の役割を果たして，語彙の幅を広げ，理解を容易にしているし，さまざまな外国語をそのまま発音によって日本語中に取り込むことができる。勿論，かなは発音自体を直接表現し，記録や初学者の学習の手段になる。

こうした日本語独特の表記方法の利点を生かし，なおかつそれを前提として組みたてられた機械が，ワープロのとるべき一つの姿のはずである。我々は，主体としての思考過程において，漢字を交えた文章を構想しながら，まず直接には，これを音でのみ表現する。ここに，ワープロが介在することは，決して不自然ではなく，我々の言語思考と表現の過程を乱さない。そしてワープロは，必要な文字の組み合わせ，場合によっては正しい文字の選択や綴りを含めて，我々に選択肢を提供し，文を書くのを助けてくれる。勿論，よりよい文作成を目指しての訂正・加筆・削除・編集は自在にできる。さらに場合によっては，「定型文」を既製品の文として提供してくるし，記憶された過去の作文を送り出してきて，我々の新しい利用の素材としてくれ

る。熟語や短文を記憶させ，コードのみで呼び出し，作文作業を高能率にしたり，固有名等を揃えておくこともできる。このような事は，過去のいかなる機械にもできなかった芸当であろう。

ワープロの入力装置が多様化してくるとともに，ワープロは，身体に障害を持つ人々が自分の意思を文章表現する上の助けにさえなってくれる。今後，音声入力方式が実用的なレベルのものになってくれば，その効果は飛躍的に大きくなろう。勿論，出力のあり方の多様化，情報システムとの結合がもたらす可能性は大きい。

外国語，とりわけアルファベットを用いる英語などでは，僅かな数の文字しか用いないから，早くから欧文タイプが用いられてきたし，この場合，それによって「書く」ことは，ペンを使うのと何ら違いがなかったのである。しかし，これは「字を書く」ことで済んできたというだけのことであって，欧文タイプは決して「文を書く」機械ではない。そのため，日本語ワープロの先輩である欧文ワープロでは，訂正，編集，レイアウトや，記憶などの働きをもっていても，タイプの機能を大きく越えるものではない。ワードラップ，ジャスティフィケーション，プロポーショナルスペース等も重要な機能だが，それは既に電子タイプが可能にしてきた。最近は，単語ファイルによるスペルチェック機構なども整備されているが，完全なものは容易にできないであろう。そして，文の構成そのものを助けるという能力を持つ機械は，まだ開発が進んでいないようである。

欧文ワープロの日本語ワープロに対する優越性は，文字数が少ないから，タイプを含むインパクトプリンタで直ちに出力できること，使用情報単位が小さくて済み，記憶や通信にはより安上がりであること位であろうか。欧文ワープロは，ワードプロセッサと言いながら，そのワードへの配慮は充分ではないし，センテンスという概念への配慮は乏しいようにも見える。それでも，最近は欧文タイプに代って普及が進んでいることも事実であるが。

一方，日本語同様多数の漢字を用いる中国語についても，最近ワープロが開発されているが，まだ全文字配列式の段階であって，著しく研究が遅れているのは，周知のところである。本格的な中国語ワープロの開発には，言語特有の障害が恐らくまだ多くあろう。

最近の研究では，将来の人工知能の開発には，日本語の方が適しているとも指摘されていることには注目できるだろう。

入力方式に現れた考え方の違い

これに対し，今日用いられているワープロも多様化しており，とりわけ軽印刷分野で用いられるワープロには，必ずしも「かな漢字変換」方式が主流であるとは言えない。電算写植の入力機に見られる多段シフト型2ストロークキー方式を一つの方式と見ることができるし，和文タイプ同様の全文字配列方式も多く用いられている。コードや連想入力による方式，かな漢字変換でも，独自のかな表示による方式なども研究され，取り入れられている。そのことが不便をきたしているとは必ずしも言えない。

かつて私は，文字を入力単位とする和文タイプよりも，熟語を単位とするワープロの方が，生産性が高くなる可能性があると書いてみたが（注―2），そうとも言えない現実のようである。文字組効率を飛躍的に高める方法は，ワープロの原理からというよりも，入力方式の開発に依っているとも思われる。

これは，文字組版作業の場合，作文とはおよそ条件が異なると考えられる。ワープロでかな漢字変換を行うとすると，［かな入力→漢字への変換］という2段階の操作を行うことになるが，2ストローク方式や全文字配列方式では，

直接その文字を選択する操作だけで完了する。だから，文字配列を記憶し，操作に熟達した作業者であれば，非常な高能率で文字組版作業ができるのである。

そうしてみれば，印刷組版作業にとってのワープロ導入の意味は，特定語等のコード化による入力能率の向上，情報処理・通信システムへの発展可能性，あるいは，割り付け，レイアウト，編集，校正などの作業のあり方の変化，禁則処理などの機械化，原稿保存などのあり方の変化などに限られるのではなかろうか。これを導入する企業にとっては，設備価格（当然電算写植機などよりは遙かに安い）とパフォーマンス（とりわけドット文字の品位の評価）の対比，ならびにユーザーサイドのニーズだけが，オペレーターの養成・雇用費用以外では，主な評価基準であるという事になろう。

それゆえ，ワープロと和文タイプの合いの子のような，インパクトプリンタ機にも依然人気がある。しかしまた一方では，オペレーターの養成や賃金も大きな経営上のファクターであるから，その点を配慮して，未経験者でも短期間で作業のできるかな漢字変換式のワープロを，組版入力設備の主力にするところも増えている。しかし，軽印刷業者のうちでは，当初予想された程に，現在の多くのワープロについては，主力設備としての関心をあまり示していないところも少なくないのには，上の事情にも原因がありそうである。

（注―2）三井逸友「巨大都市東京に集中する印刷産業小零細経営と『都市的需要』」日本中小企業学会編『国際化と地域中小企業』同友館，82年。

「字を書く機械」と「文を書く機械」

このことは，考えてみれば，印刷業にとっては「字を書く」機械のみが必要である，という従来からのあり方を端的に示している。「字を書く機械」としてのみとらえれば，従来からそれを用いてきたところには，ワープロはそれほど画期的な存在とは言えない訳である。

かな漢字混じり文として完成された原稿を受け，その文としての意味内容を離れ，文字の配列に対してその通りに，そして割付けやレイアウトの変更を加えながら，印刷用の文字の列に組んでいく，という作業だけならば，「文を書く機械」としてのワープロの能力はほとんど生かされないし，つまるところ，文字組版機械の一種であるということに留まるのである。

これは，別に不都合なことではない。むしろ，原稿受注を前提に仕事をする印刷企業にとっては，そのあり方に即した，生産効率の高く，そして入口・出口両面にわたりよりシステム的な発展が可能で，関連設備と結びつけられ，さらにより高い品位の仕事のできる（高品位な文字出力や，図版等を含めた総合的なイメージの組版化など）文字組装置としてのワープロの発展が期待されるはずなのである。

日軽印が開発した「くみはん30」をはじめ，最近，印刷組版向けのワープロシステムがさまざま登場するようになっているのも，これを示している。

つまり，一口にワープロと言っても，現在あるもの自体，その意味・用途が分かれつつあると考えられよう。その一つの考えが，「文を書く機械」としてのワープロと，「字を書く機械（あるいは，並べる機械）」としてのワープロという区別である。

我々素人にとっては，短期間で，容易に操作でき，これによって「文が書ける」機械が欲しい。この場合，複雑な作業ができるということは，まったくの過剰機能であって，機械から人間を遠ざけるのみである。勿論，効率としては，人間の考える速さに合っていればよいのであって，それ以上でも以下でもある必要はない。

また，一般のオフィスワークの上では，長い

文章を綴るよりも，定型文や，複雑なレイアウトのものの方が多用されるかもしれないが，ここではその中での分業化が生じるのであって，日常文書や手紙の作成発行にあたる，秘書的用途のものに留まらず，原稿作成のためのワープロと，それに基づき，整理・編集したり，多数作成・送付したりする作業のためのワープロが分かれてくるはずである。また場合によっては，記録や資料，翻訳などを一時に大量に文章にしたりする，という用途にあわせたワープロも必要となるはずである。前者はやはり，「誰でも，すぐに」操作でき，文章作成を助けてくれるものでなければならないだろう。

機械というものは，専用化が進んでこそ，使い易く，また充分使いこなせるものになるのであって，「何でもできる」機械は，もっとも使いにくく，その使いこなしに非常な経験と熟練を要するものである。その意味から言えば，現在のワープロは，マイクロコンピュータの専用機化として成功したものの，まだ充分に，そのニーズに合わせた分化・専用化を遂げているものではなく，中途半端な構想に留まっているものが多い感がある。先に挙げた，我々一般人の中でもさらに，幾つかの人種が分けられるはずであって，日常，文を書くことを仕事や，主な趣味にしている人間と，たまに手紙位しか書かない人間とでは，ワープロの果たすものも違うはずであろう。

「望ましい入力方式」とは

さらに，こう見てくると，現在主流となっている「文節変換」入力方式は，文を書く機械としては，必ずしも，適していないことも感じられる。この場合，文を綴っていくという作業と，これを区切り，漢字に変換していくという作業が交互に行われていくことになり，作文する思考過程を妨げるものである。

(ニチエイ)は印刷業者のための
欧文《組版》《翻訳》専門業者です。

すぐれた技術が・安く・早く・美しく・をモットーにお届けいたします。

電算写植＝CRトロニック

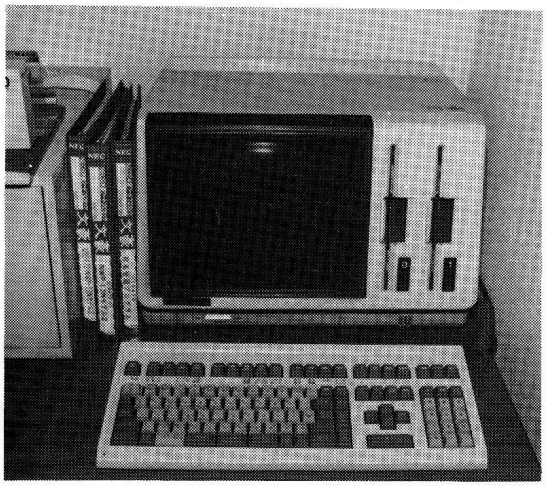
●4ポイントから72ポイント
●0.1ポイントきざみのバリエーション
●現有書体160種×イタリック・長体・平体の変形自由
●IBM清打・版下 ●翻訳もご活用ください。

※ご一報あり次第、書体見本をお送りいたします。

株式会社 日英

☎東京(03)293-0521(代) FAX. 東京(03)293-9350

〒101 東京都千代田区神田錦町2－5



我々は，考えをまず音声的表現にしているのであって，そのために考えたことを直ぐに口から話すことができるのである。これと文字表現が結びついているのが日本語の特徴ではあるが，一々漢字変換をしていくのでは，やはり頭の方が混乱してきそうである。

この事には，ワープロメーカーも気付いていて，いろいろ改良努力を行っている。複文節変換方式や，1文一括変換方式，一括入力逐次変換方式，さらには，一括入力一括自動変換などという離れ技も現れている。

しかし，それらの方式でも，文節毎の区切り動作が予め必要なのでは，あまり変り映えがしないし，また，いかに高度な文法解析力や頻度研究に基づいているといっても，同音異義語の甚だ多い日本語を相手にする限り，主体の選択なしで機械の方が完全な変換を行うというのは，やはり不可能であろう。それを追求しなければ，遂にはワープロは「文を書くための機械」から，「書いてくれる機械」になってしまって，主体の存在余地がなくなってしまうかもしれない。

現在，高度な自動変換能力を売りものにしているワープロには，誤って変換された語の訂正動作がかえって容易でないものさえ見受けられる。

もっとも，主体抜きでもある程度作文をしてくれる機械というのも，考えようによっては，ルーティン化した文を繰返し書き続けるオフィスワーク等には，むしろ適している場合もあるかもしれない。言わば「作文ロボット」であろうか。また，文節変換方式は，完成原稿を，高熟練者でなくとも正確にかつスピーディーに文字組みするには向いているのであって，そうした清書などのオフィスワーク（こうした仕事が従来非常に多かった）を始め，こうした機械に慣れたオペレーターによる印刷用入力作業などには適しているとも考えられる。

しかしそれでは，ワープロは和文タイプの代用の位置を占めているのであって，文化や言語表現手段全体の変化の流れに即しているとは言えない。

「文を綴る」ところ，つまり入口からワープロが使われるようになってきてこそ，ワープロは文化の表現手段・方法を，従ってそれを取り扱う過程自体を変えていくし，また事実変えつつあるのであって，その意味では，「文節変換」方式というのは，過渡的な方式のようにも見える。キーを用いる入力方式のうちでも，先に言ったように，今後，ワープロを扱う人間，用途，情報の流れのうちでの位置などに応じた，方式の分化が進むであろうし，またそうあってよいはずである。

現在までは，かなキーボードの改良等に，研究の焦点があったようであるが，私自身の感想から言えば，「文を書く」については，ローマ字キーによる入力が断然優れていて，いささかの不便もない。国際化の時代で，欧文のキーボードに接する機会が否応なく増えてくるし，多くの人がローマ字の用法を学習するようになってきているのであるから，これらとの共通性からも，また多くのキーを覚え，用いる必要がない点からも，望ましいように思われるが，如何であろうか。勿論，「字を組む」作業には，1キーで済むかなキー方式や，他の効率的入力方式の方が適しているかもしれない。

特別寄稿

実感的文化表現論(下)

三井逸友

ワードプロセッサは何を変えるか？

体験論はおもしろい。机上のものでないだけに現実感に迫ります。

先月に引き続き，ワープロを知的生産に活用している三井逸友氏（駒沢大学教授）に，そのワープロ体験から，実感的文化表現論「ワードプロセッサは何を変えるか」と題した論稿をお届けします。

今回は，ワープロの互換性，記憶装置など機能面の問題点について言及しているほか，本稿の眼目である「ワードプロセッサは何を変えるか」という内容で締めくくります。

さて，ワープロは経済活動のみならず，科学，文化の創造のあり方を，どのように変えていくのでしょうか。

第3章 ワープロの実感的問題点

互換性の欠落

現在の激しいワープロの新製品開発と販売競争は，ワープロの価格を急低下させ，その普及を助けていることは事実だが，さまざまなマイナス面も含んでおり，事態の進展によると，折角の画期的機械の効果の発揮を，10年遅らすことにもなりかねないように思われる。

その第1は，言うまでもなく，メーカー間の互換性がまったくない点である。印刷業界をはじめ多くの方面から切望されてきたにもかかわらず，この問題が解決に向う兆しのないまま，各メーカーは，自社規格のシェア拡大にのみ懸命となり，そのためには，コスト割れ売価の商品でも大量に売り込んで，テリトリーを広げておこうという姿勢さえみられる。ＶＴＲの方式より遙かに始末が悪い（もっとも，ワープロは，文字という記号変換の結果を出力し，それ自体が汎用性・共通性を持つのであるから，その限りではあまり不便はないのであるが）状態であり，本来システム性を持つからこそ，画期的な能力と将来性を持っているはずの機械が，異なるメーカー製の機械単体でバラバラに用いられるのみとなっている状態である。それどころか，同一メーカーの製品でありながら，次々に新技術を開発し，新製品を出していくため，相互の互換性を無視ないし軽視した商品政策も見られる。「ワープロは使い捨て」というのであろうか。

漢字を含むワープロの文字は，すべてＪＩＳで統一された情報コードを用いているのであるし，出力部分としてのプリンタは，多くの場合同一メーカーの製品を使用しているのであるから，これは誠に奇妙な現象と言わねばならない。コンピュータ市場におけるＩＢＭのごとき“ガリバー型”寡占企業無き日本産業における競争特性が，裏目に出た結果と言えよう。

入力方式や諸機能をめぐる開発・改良競争は歓迎すべきことだが，作成データの互換性の確

立は焦眉の課題である。これも今後は，幾つかのメーカーの協調，グループ化が生じてくることにより，徐々に部分的に進むのであろうが。

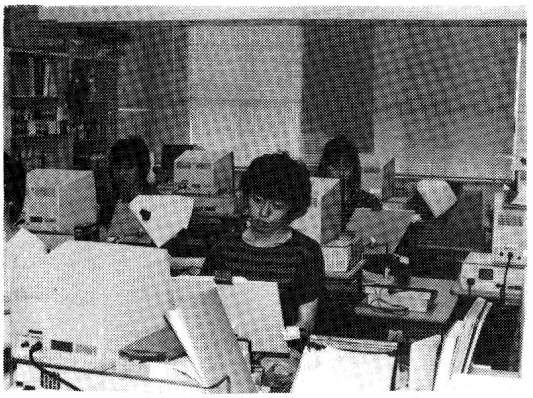
記憶装置の問題

次に，記憶装置・媒体の問題がある。その互換性は言うまでもないことだが，外部記憶媒体の乱立ぶりも困ったことである。種類として挙げてみても，カセットテープ，ＩＣカード，ＲＡＭカートリッジ，ＲＡＭパック，ＦＤ，ミニＦＤ，マイクロＦＤ，クイックＤ，ディスクシート等々，それがまた，カセットやＦＤ以外ではメーカーがさまざまな規格のものを採用，ＦＤにも専用化したものもあるという具合である。

これら記憶媒体と，熱転写プリンタのインクリボンは不可欠の消耗品であって，いつでも容易に手に入るようでないと困る。後者もさまざまあるが，実はプリンタ自体は同一メーカーのものが多いため，意外な互換性がある。しかし，記憶媒体や記憶装置については，かなりバラバラで，メーカーもその互換性や規格をほとんど明言しようとしない。

従来の事務機器や事務用品の売り方では，アフターケアの能力のある専門販売店がこれを取り扱い，機器保守や消耗品供給などのサービスを提供してきていた。その場合は，あまり不便はなかったのである。ところが，ワープロが，一般消費者向けに大量につくられ，非常に多くの小売店の店頭に並ぶようになっても，バックアップの体制は非常に不充分である。各メーカーは，記憶媒体などはオマケのようにつけて売らせ，後は知らんふり，という事を黙認しているのではないかとさえ勘ぐりたくなる。

実際には，記憶装置はワープロの主要構成部分なのであって，これを活用しなければ，ワープロは大して役には立たない。第一，本体内の記憶容量だけでは，すぐにパンクしてしまう規模のものが少なくない。しかしこの点を重視した売り方がなされているとは思えないし，本体



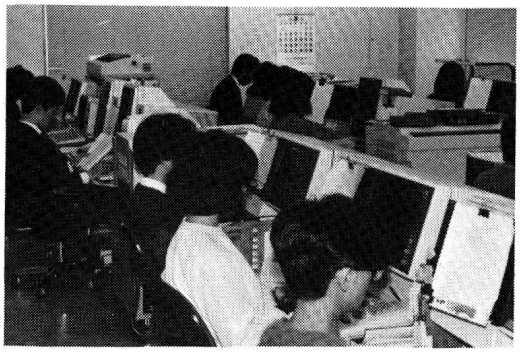
の価格が急低下しているのに比べ，記憶媒体の価格が不釣り合いに高価なものもある。そして，現在の目まぐるしい新製品合戦では，消費者は，記憶媒体やインクリボンの供給がいつまで守られるのか，どこで手に入れられるのか（それよりも，自分の買った機械のメーカーがこの市場から撤退してしまわないか），不安を抱かずにはいられない状況である。

こうした状況がもたらされるのも，ワープロがコンピュータから生まれ，そのコンピュータのシステムや周辺装置が日進月歩であることに起因しているからであろう。しかし，現状は，コンピュータを扱う専門技術者や一部のパソコンマニアの世界でのみ通用する「常識」や知識が，初めてワープロを相手とするようになった多くの“素人”に押し付けられている感がある。

この点では，ワープロが氾濫し，量販店やディスカウントショップの店頭に並んだことから，商品知識の不充分な店員が客の相手をしている状況で，混乱と消費者の困惑が加速されていると言える。激しい新製品開発で極端に製品のサイクルが短くなっているのも，店頭での混乱を招いているのである。

実用性の乏しい機能の付加

次にワープロの機能であるが，多くの商品に見られるのと同様，ここでも，多機能化により製品差別化を図り，売上を延ばそうとする志向が見られる。計算，グラフ作成，作図，作表，



イメージ読み込み，字体拡大等々，次々に，新しい機能が，より低ランクの製品にまで載せられていく。こうしたことは止むを得ない傾向でもあるし，その産物も大きいのであるが，利用者にとっては有難くない面も少なくない。

加わってくる諸機能のうちのかなりの部分は，「あってもなくてもよい」，あるいは「あったほうが便利なこともある」類である。多機能ぶりをセールスポイントにしている機械を使っている人に聞くと，その機能の大部分は，使わないか，ほんの稀にしか使わないものである。逆に，そのためマニュアルは膨大なものになり，まず通読不可能なものになってしまう。それだから，「あって便利な機能」でも，実際に働かすとなると，その機械に慣れているはずの人間でも手順が分からず，マニュアルと首引きで一苦労という光景がよく見られる。こうした点については，メーカーも努力していて，マニュアルを工夫したり，対話式の操作を取り入れていったりしている。しかし，多機能性が肝心の働きの邪魔になったり，機械の価格を引き上げる理由になっていたのでは，買った人間は救われない。

先に書いたように，ワープロは，コンピュータを専用機化したから，便利な画期的機械になれたのである。しかし，そのコンピュータ自体の持つ能力を使い，新しいソフトウェアを組み込んでいけば，多機能化は果てしなく広がるのであるが，それでは元へ戻っているに過ぎない。

今必要なのは，1台で「あれもできます，これもできます」という機械なのではない。折角これだけ単体の価格が安くなり，サイズも小さくなったのであるから，先にも強調したように，用途，条件に合わせた専用性の高い機械が望ましいのである。そして，まさしくそのシステム性を発展させ，ソフトウェアやアタッチメントの面からの機能の多様化を可能にし，さらに，用途に適した機器を結ぶネッワーク的利用ができるようにしていけばよいのである。

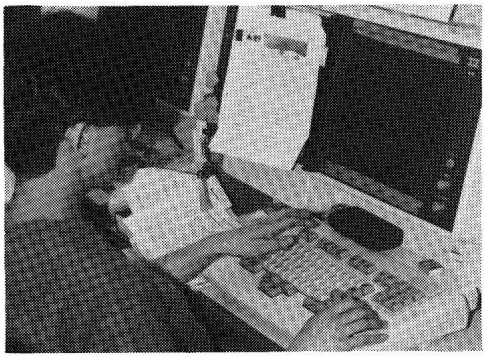
その意味では，現用されているパーソナル・コンピュータ（パソコン）のワープロとしての利用の方が，用途に応じた柔軟性とシステムとしての発展性を持っているようにも見える。事実，そうした点を期待して，パソコンにワープロソフトを載せて使うという話をしばしば聞く。

こうした方向も望ましいものではあろうが，それには，現用のパソコンが，およそワープロ向きにつくられていないことを無視する訳にはいかない。キーボード仕様は勿論のこと，ワープロソフトを起動させても，文を入れられるようになるまでの手間が一通りではない。また，同一ハードに対するワープロソフトでも，作成メーカー間でのデータの互換性が確保されていない。パソコンメーカーは少くとも何故，ワープロ用ソフトと共に，ワープロ用キーボードを開発し，接続可能にしないのであろうか？

こうした行きかたは，やはり現状では，ワープロとしてパソコンを，ではなく，パソコンからワープロへ，という道筋の方が妥当のようである。

望ましい機能とは

多機能化のなかでも，データベース的機能を持たせることは，実際の用途・効果が大きい。作文のうえでも常時活用できるし，最近では，一般企業の顧客名簿の類だけでなく，さまざまなグループ，サークル等をつくり，その名簿を管理・整理し，さらにそれによって宛名印刷を



行うことが，どこでも非常に多くなっている。一般消費者でも，手紙等の文書の作成と，宛名の印刷という用途はかなり多いと思われる。

また，いわゆるユーザー登録辞書というものは，使用してみると極めて重要な機能であって，この容量が大きければ，基本辞書の語数は僅かで済むし，その方が作業は効率的になる。さらに，類語辞書など，表現の工夫をサポートするものが載っていると，文を書くうえでは非常に便利であろう。今後は，ワープロが翻訳機の機能まで果たすものが出現すれば，画期的に用途が広がりそうである。

これに類することとして，ワープロの外部記憶を用いて，原稿の各部分や，作成済定型文書をファイル化し，これらを呼び出し，組み合わせて作業をしていくのも，広い意味でのデータベース利用と見なせるのであって，ここでその整理やさまざまなコードによる呼び出しなどが自由にできると，使い勝手はよくなる。

ただしそのためには，記憶装置や媒体自体が，かなりの能力のものでなければ無理であろう。それゆえ，今後は小型のワープロでも，記憶装置だけは相当高品位（少なくともＦＤＤ）なものになっていくのではなかろうか。

記憶装置について言えば，書き換えが容易なのも良し悪しであって，文の書き手の立場で見れば，書き換え，修正したことの記録（修正箇所，日時等）が残る方がよい。紙上ならば，書き込みや修正の跡が歴然と残り，頭の整理がつくが，ワープロの世界では，消しゴムを使った以上に，きれいに証拠がなくなってしまい，後で混乱してくるのである。それを避けるために，紙上へのプリントアウトを繰り返せば，紙の消費，保存とも増える一方となり，何にもならない。

おわりに　ワープロが普及すれば……

ワープロ利用の良し悪し

ワープロは便利なものであるし，非常な発展可能性を秘めているが，悪影響もない訳ではない。よく見られるようになった，同音意義語の変換ミスによる“珍文”もその一つであるが，ワープロによる基本的傾向として，漢字や難語を多く使うようになり，堅苦しい文章になりがちである。自分のよく知らない字や言葉でも，機械の方で教えてくれるから，ついそれに頼ってしまうのである。

この点，悪くすると，ワープロが発達すれば，文の個性が失われてくる恐れもあろう。まさに，「ワープロが」文を書くようになる傾向である。

よく世間に言われるほどに，ワープロを使っていると字を忘れてくる，ということはあまり言えない。用いる字は，自分自身でその正しさを確認していく必要があるし，むしろ，正しい字体や送りがな，使い方を絶えず機械に教えられている感もある。読みが正しくないと変換されないから，否応なく覚えるという効果もある。もっともそれであれば，ワープロ内の記憶が正しくつくられていないとおおごとである。

ワープロが普及すれば，人が文を書くという機会は広がるのではなかろうか。筆と紙のほうが簡単で便利であるが，先に見たように，ワープロは文作成を助けてくれるから，作文の苦労は軽くなる。ワープロ利用によって，誤字，送

りがなの誤りなどが正され，正しい文になるとともに，用語の統一や表現の工夫が容易となる。辞書の整備がこれをさらに助けてくれよう。従って，若干堅苦しくなりがちでも，より正しく厳密な文を作れるようになってくる。そこから，一つのワープロ文体調の出現につながるかもしれない。これをさらに，自分の個性の現れる文体づくりにまで持っていけるよう，機械を使いこなすことが，次の課題であろう。

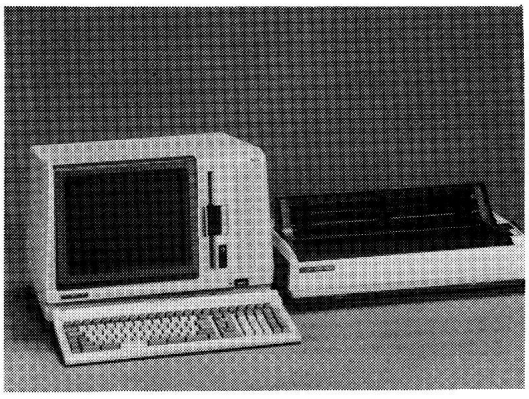
但し，こうした手入れ・仕上げの課程では，現状ではどうしても紙上へのプリントアウトを繰り返す必要がある。機械の能力の制約のみならず，人間と「情報」の対話のメディアとしては，ハードコピーの果たす効果が依然高く，即効性があるからでもある。その結果，ワープロ利用がペーパーレス化どころか，紙の多消費と洪水をもたらしていることは否定できない。

一方，悪筆ゆえに，手紙など他人に見せる文を書くのをためらっていた人間には（私もその一人であるが），ワープロの登場は福音である。さらに，印刷業には申し訳ないことだが，ワープロ作文と宛名印刷等を活用して，グループの通信や雑誌などの手作りも容易になる。ワープロによるネッワークもできる。

あるいは，こうした機械を買ってしまえば，またその前に座れば，否応なく「文を書かねば」という外的強制のような働きが生じてくる。「文を書かせる機械」と言おうか。欧米の人間がタイプの前に座れば，同じような気持ちを味わうのであろう。それに，今のところは物珍しさも手伝っている。

もっともそのため，「インプットが減り，アウトプットばかり増える」と警告している研究者もいる。本で読んだり実験や調査をしたりするよりも，ともかく「書く」ことにばかり熱中し，頭の中がからっぽになりかねないという訳である。

悪筆が救われれば，逆に文字の個性は失われ，



我が国の文化の誇る書道などの伝統が揺るぎかねないが，これは杞憂かもしれない。ワープロの文字か普及すれば，逆にヒューマンタッチな表現の価値が見直され，珍重される訳である。

しかしながら，欧米のように，手書きの文字がうまく書けない人間が増えれば，文化上大きな問題になってくるかもしれない。いくら手書きの美しい書が珍重されても，平均的レベルが低下したり，伝統が継承されなくなれば，困ったことである。けれども，これは，文化の表現・伝達の効果との兼ねあいの問題でもあって答えの出しにくいところではなかろうか。

いかに優れた書家が輩出しようとも，国民の大部分が読み書きができなかった時代と，皆が正しく速やかに，文章で表現し，読むことができる時代と，どちらがよいのか，ということである。

結びにかえて

このように見てくると，ワープロが登場・普及していくことにより，経済活動のみならず，科学，文化の創造のあり方自体が大きく変革されていくと考えてよいのではなかろうか。

一つには，文化の創造から，具体的な組立て，記号情報への変換，加工，複製，伝達・配布，蓄蔵といった一連の流れの，入口と出口の主体の位置は変らなくても，その中での人間並びに集団（企業など）の関わりかたについての，分業化と統合化の両面を持つ原理が変化し，構成

が再編成されていく。これは基本的には，情報システム，ネットワークの編成に沿っていくものであり，それによって，社会的には，費用節約と効率化，参加の条件の拡大が達成されるのである。

今一つには，文化の創造の主体としての人間には，参加の機会拡大の可能性が広まるのみならず，ワープロを始めとする創造を助ける手段を得ることになる。そして，上の過程により深く関与し，その流れからのフィードバックの効果・成果を受けるため，自らも変っていくと思われる。悪くすればそれは，機械に“従属した”人間の思考と文化創造に陥りかねないが，ワープロを始めとする文字・文＝言語体系に基づく文化創造である限り，むしろ望ましい方向への人間能力の発展が期待できるのではなかろうか。少なくとも，「ファミコン・ゲーム」に熱中する子供たちよりも，ワープロに親しむ学生の方が，未来は明るいはずである。

それにより，文化の表現，共有・享受の可能性が極めて大きくなり，さらには異なる文化圏同士の対話・交流も一層活発になるとも考えられるのである。

勿論，これによって，長い伝統を持つ文化の継承や，より個性的で多様な文化創造と表現の上で，問題の生じてくる可能性もある。そうした点は，科学技術の発達と人間生活との関わりの問題として，常に問われてきたところと共通していると言えよう。

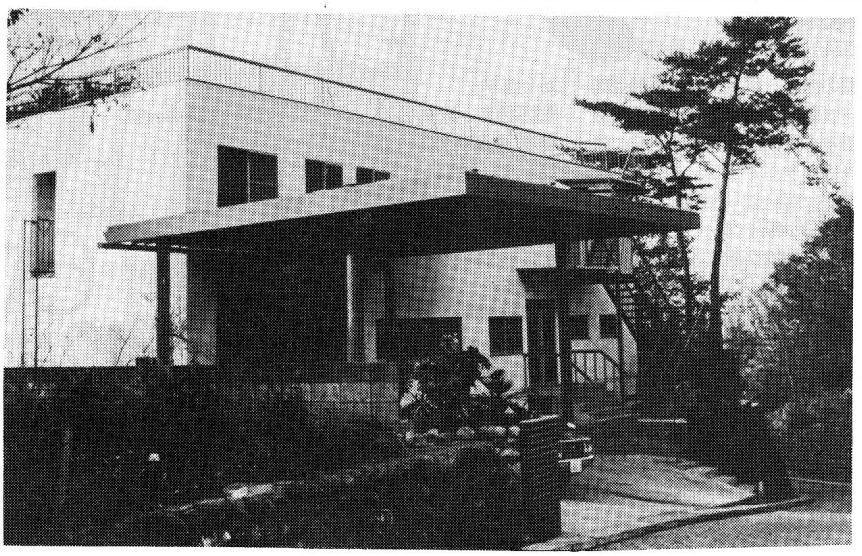
要は，ワープロを友とし，これに支配されるのではなく，自らの能力を発揮し，文化創造と表現の可能性を広げてくれるものとして，またその機械の向こうに無限の広さの「システム展開」がありうる可能性を望みながら，これを「使いこなしていく」姿勢であろう。

文字は最高級の芸術品です
その伝統を引き継ぐ書体は
日本字研社の日野工場から

あなたの活字も
字研社工場から

（富士山が一望に見える日野工場）

★鋳造る★刷る★見る★



株式会社 日本字研社

本社 東京都渋谷区初台二ノ十一
電話（代）三七〇－〇一五一
営業所 八重洲口、八王子、仙台、札幌